

## 小林和之『「おろかもの」の正義論』ちくま新書より

あとがき (全文)

この人にぜひ書いて欲しい。書き手にとって、そう思われるのはとてもうれしいことだ。そればかりか、その思いを何年も持ち続けてもらえるとなれば、ありがたいと言うほかない。

本書の執筆を依頼されるきっかけとなったのは、編集者の増田氏が拙稿「未来は値するか」「未来は値するか - - 滅亡へのストラテジー」(松浦好治編『法の臨界第3巻』(東京大学出版会、1999)を発売日に読んだことだったということだ。当時執筆を依頼する立場になかった氏は、その思いを忘れることなく現編集部に移ってから、わたしに執筆依頼のメールを出してくれたのだ。

手に入るわたしの原稿すべてに目を通した上で、わたしを「自身の肉声で思想することのできる」人だと確信したということが、原稿依頼の決め手になったということだった。

わたしがその評価に値するかはともかく、「自分の声で語る」ことはわたしが常々心がけていることだ。完全に独創的であることはできないとしても、自分でかみ砕き・消化して、自分の身になったことだけを語りたいと思う。

その「未来は値するか」は、学術論文として書かれたものだが、研究者だけではなく、多くの一般読者から時に長文の感想・意見を受け取ることができた。この経験から、分かりやすく書くことの難しさと、伝わることの不思議さについて、わたしは改めて考えさせられることになった。

「高校しか出ていない」と書かれたメールが何通もあった。その中には確かに文につたなさがにじんでいるものもあったのだが、どれも内容についてきちんと理解して書か

れていた。そうかと思うと、明晰な頭脳と豊かな教養を感じさせる文を書ける研究者でありながら、もっとも重要な部分を捉え損なっている空虚なコメントしかできない者もいた。

万人向けの書き方はない。書き手がいかに明晰に書こうと、意図することが伝わるか伝わらないかは、最終的に読み手次第である。これらを抽象的語るのは簡単だし、自分でもその程度のことは分かっているつもりでいた。だが、"自分がああ書いたことが読者にこう受け取られる"という結果を具体的に検討することは、わたしが書く力を鍛える上で非常に大きな意味があったと思う。

「分かりやすい」ということと「面白い」ということとを、わたしは別の問題であると考えていた。もちろん、さっぱりわけがわからないものが面白いはずはないので、分かりやすくなければ、面白くないということ是可以するだろう。つまり、「分かりやすい」ということは、「面白い」ことの前提になっている - - そんな程度に考えていたのだ。

だが、最近になって実は逆かもしれない、と思うようになった。面白いから分かりやすい。面白くなければ分からない。理解にはそういう一面もあるのではないか。複雑な問題を丁寧に解き明かそうとすると、ただ分かりやすいだけでは退屈で集中力が持続せず、理解するに至らない。興味をかき立てられてこそ、何度も考えて理解しようとする気が起こる。それもまた真実ではないか。

本書では、これまでの反省の上に立ち、できるかぎり面白く書くことを心がけた。きちんと説明しようとする、どうしても退屈な部分はできてしまうものだ。それはある程度は仕方がないとしても、せめて興味が切れてしまわないように気を遣ったつもりだ。

だが、面白くすることが本当にいいことだろうか、という疑問はもちろんある。面白くするためには、面白くするための字数が必要だからだ。面白くするために字数を費やすことは、主題の説明のための字数を減らすことにならざるをえないのだ。それは本末転倒ではないか？

このあたり、学校給食のメニューを考える栄養士の苦勞に似ているかもしれない。ほんとうに大事なものは、身体に必要な栄養素をきちんと摂取させること。でも、まずいと食べてもらえず、けっきょく身体の栄養にならない。美味しく残さず食べられるようにしたいと思うけれど、美味しさを優先すると、栄養素の摂取に問題が出る。

栄養と味の高度なバランスを実現するためにまずすべきことは、ムダを省くことだろう。本書でもムダをできるかぎり省くことを心がけた。だから、本書には哲学者・研究者の固有名詞がほとんど出てこない。食事で大事なことは、美味しくて栄養があること。書物で大事なことは、面白くてためになること。だとすれば、素材の名前や来歴を知ることが重要じゃないはずだ。

"このたこ焼きには、明石のタコを使っています"という類の能書きには、商売としては意味があるだろう。なんとなく美味しそう、という雰囲気を出せるからだ。だが、ほんとうに大事なものは、美味しいかどうか・栄養になるかどうか、と思うのならば、素材の名前や来歴はどうでもいいことだろう。食ってうまい、確かに身になる、そのことこそが重要であるはずだ。

読んで面白い。考える力が身に付く。それが大事だと思うからこそ、本書では哲学者や研究者の名前をいちいち挙げることはしなかった。先人の無批判なコピーをしていないからでもある。もちろん、先人の業績の恩恵を受けてい

ないなどと言うつもりはない。それでも、わたしは、自分の血肉となって「正しい」と思うことだけを書いた。

人間がその肉体を保つために栄養素が必要であり、その摂取において美味しいことは重要である。人間がその精神を保つために「正しい」ことが必要であり、その摂取において「面白い」ことは重要である。

そして、「正しさ」について理解し考える力が身に付くことは、栄養素の効果を理解する力が身に付くのとは全く異なった意味を持つ。タンパク質は、人がその効能を知っていようとしまいと存在する。だが、「正しさ」は人が考えることをやめれば世界から消えてしまうだろう。そして、「正しさ」は、常に語られなければならない。心の奥底にしまわれた「正しさ」は思いこみでしかない。「正しさ」は人と人との間に成り立つのだ。

われわれは、十分に「正しさ」について語っているだろうか。わたしは、今ほど「正しさ」について語ることが重要な時代はないと思う。本書が「正しさ」についてさらに語るひとつのきっかけになることを願ってやまない。